



似てる？似てない？ドイツ人と日本人

山崎 詩郎 (大阪大学 特任講師)

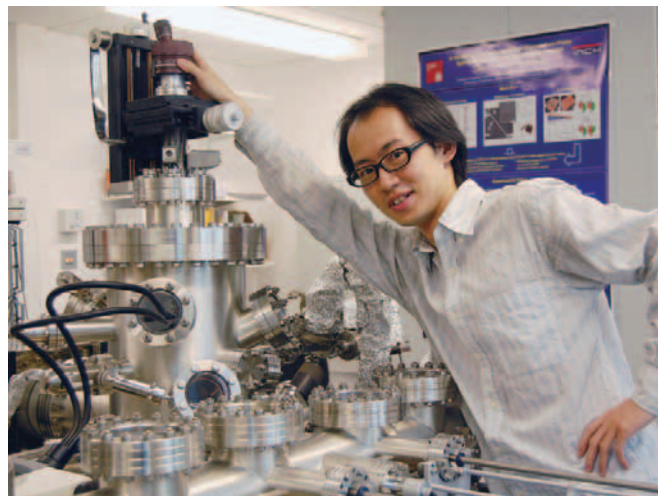
『4月からくるか？』メール一通で私のドイツ行きが決まった。私は物理学科の長谷川修司先生のご指導のもと、原子1個厚さのシートに流れる電流の物理研究で博士号を取得した。その後、物性研究所の長谷川幸雄研究室の博士研究員となり、走査トンネル顕微鏡という原子が見える顕微鏡を用いた物性研究を行った。どちらの研究室も国際色豊かで、海外ポスドク経験の話をよく聞いた。それらの影響で一度は海外に行って彼らの研究だけでなく、そのやり方を見てこようと決めた。受け入れ先候補のドイツハンブルグ大 (University of Hamburg) のウィゼンダンガー (R. Wiesendanger) 研究室は分野では世界1, 2を争う憧れの研究室だ。ダメ元で英語の履歴書を送ってみたところ、ラッキーなことちょうど私のこれまでの経験を融合したような新計画が進んでいた。

「Shiro」と書かれたプラカードをもった共同研究者に入国ゲートで迎えられて、私のドイツでの研究生活が始まった。まずむこうの得意技であるスピン偏極走査トンネル顕微鏡の技術を親切に教えていただいた。徐々に研究の内容だけではなくドイツ人の研究のやり方がわかってきた。あるとき実験装置の部品のサ

イズが合わない問題が見つかった。私は部品を一生懸命やすりで削ったり万力で反ったりしてサイズを微調整しようとしていた。それを見てドイツ人共同研究者は、試みもせずにデザインをやり直そうと

いうのだ。日本人は対症療法、ドイツ人は根本治療を好むという文化の違いが肌で感じられた。これは研究でも同じだった。日本人は目の前にある試料や装置を工夫して手間暇かけて出せる結果を出すという風潮がある。ドイツ人は初めからNature誌に論文を載せるための試料や実験計画、結果をデザインし、短時間で結果を出した。

『ドイツ語は話せる？』日本人から100%聞かれる質問だ。研究室の公用語は完全に英語で、買い物先でも英語が普通に通じる。そのため私は20単語ほどドイツ語を覚えただけで不自由なく生活できた。数字もパンを買うときに便利な



■ ドイツ製実験装置を操作する著者

PROFILE

山崎 詩郎 (やまざき しろう)

2007年 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了 博士 (理学)

2007年 東京大学物性研究所 博士研究員

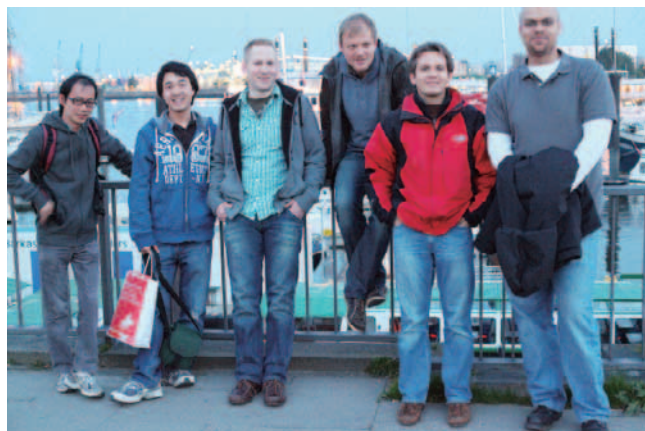
2009年 ハンブルグ大学 Wiesendangerグループ 博士研究員

2012年 大阪大学大学院工学研究科 特任講師

ころも好きになっていった。

ドイツ滞在も後半に差し掛かる。前半はむこうの技術を習得することが中心だったが、後半は自分の技術を輸出して新プロジェクトを主導しなければならなかった。試料から、実験装置の立ち上げ、実験計画など、すべて自分で決めなければならない。必要に応じてドイツ国内や海外の研究室を訪問し情報集めを行った。海外で自立して研究を遂行するというのは厳しくも素晴らしい経験だった。

2年8ヶ月のドイツ滞在から帰国した時には考え方がだいぶ変わっていた。ドイツの素晴らしさに触れただけではなく、日本がどんなに稀有な素晴らしい国か気づかされた。君も一度海外に飛び出してみよう！



■ ハンブルグ港にて研究室メンバーと (著者左端)

ようにアインからツヴァイまで覚えてただけだ。ドイツ生活でなにより楽しかったのはオクトーバーフェストなどの祭りだ。巨大な仮設会場をつくるパワーとそれを全力で楽しむ陽気さが半端ない。ドイツのそんなと

ハイジの国でポストク生活

小藪 大輔 (総合研究博物館 特任助教)

2013年の春から本学総合研究博物館に特任助教として東大に戻ってきた筆者だが、東大に戻ってくるまではスイスでポストク研究員をしていた。今はもう過去の話になってしまったが、当時のポストク生活をご紹介できればと思う。

筆者は哺乳類の頭部進化について比較解剖学と進化発生学の立場から研究してきたが、共同研究を進めてきたスイス連邦チューリッヒ大学のマルセロ＝サンチェス (Marcelo Sánchez) 博士を頼って学位取得後にスイスにわたり、氏の勤務する大学附属古生物学博物館でポストク生活を始めた。スイスは九州ほどの面積でわずか800万人程度の小さな国だが、100万人あたりの2008～2010年の平均出版論文数がアメリカ(1000本)の2倍、日本(500本)の約5倍の世界ダントツの1位(2500本)という驚

異的な研究力を誇っている国だ。筆者が所属していた大学内はきわめて国際的で、古生物学博物館にも10カ国近い国々の出身者が居た。チューリッヒ州はドイツ語が公用語なのだが、チューリッヒ大学の大学院以上では英語が学内の原則的な公用語で、講義もセミナーもすべて英語で行われていた。そのため、ドイツ語が全くできない筆者もほとんど不自由を感じることなく研究生活を送ることができた。

いっぽうで、欧州の労働習慣は日本のそれと違っていてたいへんに驚いた。日本では深夜までラボの明かりが灯っていることが当たり前だったが、欧州では5時を過ぎる頃には大半の人が帰宅してしまう。どちらの労働習慣が良いのか分からないが、筆者もつられて自然と夕方には帰宅するようになってしまった。また、ワークライフバランスを重視して、休暇も定期的にしっかり取る方が多いように感じた。筆者を含め日本人は根を詰め年がら年中研究するタイプが多いが、働くときは働き、遊ぶときは遊ぶ、というメリハリのある労働習慣のほうが、生産性が上がるのかもしれないと反省させられた。そのため、筆者も二ヶ月に一度くらいで旅行に出掛けてリフレッシュすることを心掛けていた。欧州内は航空券がきわめて安く、また鉄道網も発達しているため、思い立ったらすぐ他国へ行くことができ

PROFILE

小藪 大輔 (こやぶ だいすけ)

2006年 京都大学総合人間学部生物科学専攻卒業

2008年 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻修士課程修了

2008年 日本学術振興会 特別研究員

2011年 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻博士課程修了 博士(理学)

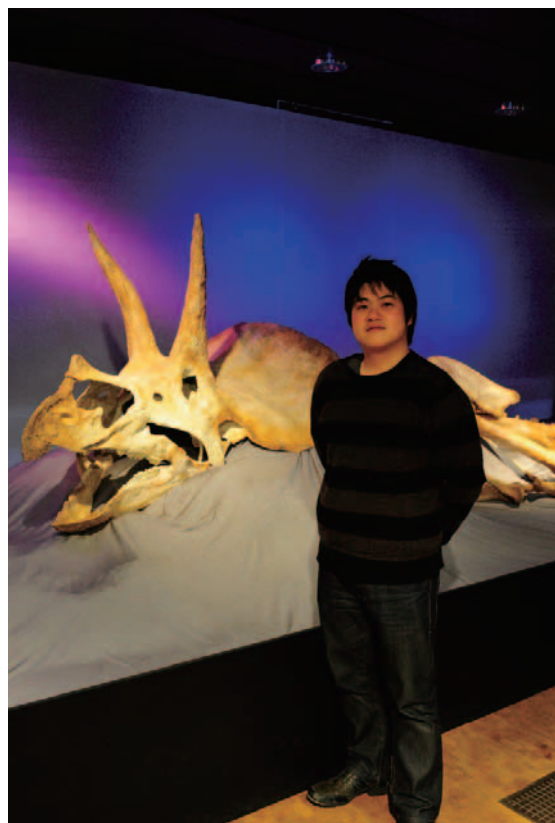
2011年 京都大学総合博物館 日本学術振興会 特別研究員

2011年 スイス連邦チューリッヒ大学古生物学博物館 日本学術振興会 特別研究員

2013年 東京大学総合研究博物館 特任助教
趣味 カヌー

る。そのおかげで、そんなにお金を使うことなく、10以上の欧州の国々を訪れることができた。

確かに欧州は日本と違ってお店が7時には閉まってしまったり、日本食が手に入りにくかったりとももちろん生活面で不便な点もあるいっぽうで、研究面では基礎研究分野の研究費もまだまだ潤沢で、日本ではポストクの職が見つにくい分野でも欧州では募集が無数にあたりする。たとえば、進化生物学関係では Evolution Directory (http://evol.mcmaster.ca/cgi-bin/my_wrap/brian/evoldir/Jobs/) というサイトが欧州の沢山のポストク公募情報を載せている。また、欧州は研究者人口が多く、各国間の行き来の垣根も低いいためさまざまな国の研究者と自然と人脈を広げることができ。修了を控え、ポストク先について悩んでいる人がいたら、ポストク先を日本だけに絞らず欧州もポストク修行の候補地として考えてみてほしいと思う。



古生物学博物館の展示を背に立つ筆者